

「雪」を題材にした単元づくり

北国で過ごす子どもたちにとって、「雪」はとても身近です。雪遊び、スキーやスケート、除雪など繰り返し取り組むことができます。だからこそ、「冬」や「雪」を「親しむ」という感覚をしっかりとてるようにしたいものです。

北海道には、この「雪」を楽しむために、たくさんの観光客が訪れます。北海道の冬がそれほど魅力的だからです。この魅力的な素材を効果的に教材化することは、とても価値のあることです。

ここがポイント

身に付けたい力を明確に！

生活科のどの単元でも言えることですが、「雪」の単元を通して子どもに身に付けたい力を明確にしておくことが大切です。進んで雪と関わり楽しみを創り出そうとする力、雪の特徴を生かして遊びを工夫する力など、いろいろ考えられます。

そうすると、この単元が終わった時の子どもの姿をイメージすることができます。

- ・雪と親しみ、自ら生活を豊かにしようとしている。
- ・雪の不思議さ、面白さに気付いている。
- ・友達と関わって遊ぶと、より楽しくなることを実感している。

このような子どもの具体的な姿をイメージすると、そのために必要な体験や活動を思い描くことができます。そして、子どもの興味・関心や意識の流れを想定して活動を構成していくとよいでしょう。

ここがポイント

どの内容で扱うかを考えて！

生活科は、具体的な活動や体験を通して学ぶとともに、自分と対象との関わりを重視するという特質をもとに9項目の内容で構成されています。雪を題材にした単元づくりを行う際に、どの内容で扱っていくかによって、目標が変わってきます。

例えば、「（５）季節の変化と生活」として扱う場合には、公園や施設に何度も足を運ぶことで、春、夏、秋からの変化を実感し、冬ならではの楽しみ方を発見するような単元になります。

そこには雪だけではなく、風や氷なども、子どもの気付きに応じて広く学んでいきます。また、「(6) 自然や物を使った遊び」として扱う場合には、雪そのものを使った遊び(雪合戦、雪像づくりなど)や雪をフィールドとして楽しむ遊び(そり、スキーなど)などを通して、遊びを工夫していくような単元となります。

さらには、複数の内容が合わさって単元がつけられる場合も考えられます。

Active

単元構成を考える際に、児童の実態を十分に把握しておくことが大切です。これまでにどのような活動や体験をし、どのようなことに興味・関心をもっているのか、また、どのような育ちがあったのかを知ることによって、単元の入り方や活動の仕方が変わってきます。幼稚園や保育園でたくさん雪遊びを経験してきた子どもたちであれば、その体験を生かし、遊びを更に工夫していく活動に重点を置きます。

また、雪が降った公園に、何も持たせずに遊びに行くのか、それとも、これまでの体験から、自分なりに楽しむための道具を持って遊びに行くのか、児童の実態や目標に応じて考えておく必要があります。

気付き！

「雪」は、条件によって様子変化します。そのため、不思議さや面白さに気付きくことができる教材と言えます。子どもたちが繰り返し「雪」と関わることで、たくさんの気付きを生み出せるようにしていきます。「さらさらの雪」「べたべたの雪」といった雪質の違いに気付かせたい時には、天候や気温が違う日に活動させます。「今日は雪だるまが作りやすいな。」「今日の雪はよく滑るな。」といった子どもの声に耳を傾け、「どうしてかな？」と問いかけると、子どもから様々な反応が返ってくることでしょう。子どもによっては、「日なたと日かげ」「時刻と気温の関係」など、3年生以上の理科につながる気付きをもつこともあります。

